保存版

金沢・釜利谷と伊丹家の歴史

六浦郷・金沢郷における、伊丹家の歴史的背景

一般財団法人 伊丹エール財団

目次

刊行にあたって
伊丹エール財団　伊丹次郎 —— 1

第一章 鎌倉時代の金沢・六浦

鎌倉時代の外港としての六浦津 …… 4
平安時代から鎌倉時代の六浦荘 …… 6
六浦に鎮座する瀬戸神社 …… 7
鎌倉時代の六浦、金沢北条氏の成り立ち …… 8
北条実時と金沢文庫の発展 …… 13
鎌倉幕府の滅亡と六浦 …… 15
室町時代の六浦（足利尊氏と鎌倉公方） …… 16
金沢の古道　大道　六浦界隈 …… 18
金沢の古道　白山道界隈 …… 19

第二章 中世・近世（室町・江戸時代）の金沢・六浦

中世から戦国の世へ …… 21
釜利谷伊丹氏の館 …… 22
当時の「村の生活」 …… 24
後北条氏と金沢 …… 27
伊丹氏の系譜とその活躍 …… 28
歴史に記される伊丹家の人々（抜粋） …… 30
紅葉山御神領の村　坂本村 …… 36
直参旗本伊丹氏（知行地・上州吾妻郡） …… 40
江戸時代、金沢の領主 …… 43
釜利谷伊丹屋敷 …… 46
坂本村名主　伊丹太左衛門家文書 …… 48
走川・平潟の埋立てから始まった泥亀新田 …… 52
金沢八景の成り立ち …… 59

第三章 近世・現代（幕末・明治時代）

六浦藩と戊辰戦争 …… 62
伊丹氏最後の幕臣、伊丹桃之丞 …… 64
江戸から明治への移行 …… 67
急速に進む道路整備 …… 69
釜利谷・伊丹氏祖先の名跡を継ぐ …… 70
波乱の明治　激動の大正　戦乱の昭和 …… 78

金沢の地に創業 …… 81
伊丹氏系図 …… 82
伊丹家系図 …… 83
伊丹氏家系年表 …… 84
引用文献 …… 88
写真・情報提供者一覧 …… 91

第四章 金沢区の拡がりと各町の歴史

旧六浦荘村エリア …… 94
旧金沢村エリア …… 98
埋立地エリア …… 106

おわりに
伊丹エール財団　伊丹次郎 —— 111

第一章

鎌倉時代の金沢・六浦

鎌倉時代の外港としての六浦津

◆ 中世の金沢区（出典：横浜市ふるさと歴史財団） https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/cms_files_maibun/pr_brochure/my026.pdf

鎌倉時代の金沢・六浦は、武蔵国（東京都・埼玉県の大部分、神奈川県北東部）の南端、久良岐郡に属していました。しかし「相州六浦」と記された資料から推察すると、平安後期に上総国（千葉県中央部）を戦乱に巻き込んだ「平忠常の乱」の追討のために、鎌倉から上総へ通じる六浦は海上交通の要衝として相模国の支配下におかれていたと考える識者もいます。このように、鎌倉の外港としての六浦の歴史は、源頼朝が鎌倉に幕府を開くかなり以前からすでに始まっていたようです。

◆ 宝樹院

■六浦津の発展と六浦道

金沢区内大道にある宝樹院には、古い阿弥陀三尊像が安置されています。この仏像、その昔は宝樹院の山の下に江戸時代の末まで存続した常福寺の本尊です。常福寺は称名寺の末寺であり、室町時代に六浦の港から鎌倉へ通じる街道の要所に位置し、荒廃する称名寺の再建修理するために関所が設けられました。この仏像は12世紀後半頃の造立と考えられ、神奈川県重要文化財に指定されています。平成3年（1991）に仏像の解体修理が行われた際、弘安5年（1282）7月付の称名寺開山審海筆の『阿弥陀三尊像修理願文』に、仏像が造立された当時の棟札が転写され、常福寺が平安時代から存在していたことが明らかになりました。

◆ 宝樹院阿弥陀三尊像

さて、地形から見た六浦は、大きく入り込んだ内湾を囲む地形を利用した港町でした。「六浦津」と表記されることも多く、「津」とは海や河など、船が停泊できる港を指す言葉です。六浦津がいつ頃から機能していたかは不明ですが、鎌倉を拠点にしていた源頼義が鶴岡八幡宮を建設したことが一つの契機と考えられています。また、鎌倉と南関東を結ぶ六浦道が鎌倉へ運ぶ物資の輸送路として機能すると、海路による陸揚げ場として発展したようです。北条泰時による朝比奈切通の開通により、六浦道は鎌倉と六浦を結ぶ幹線道路となって六浦津はさらなる発展を遂げたと考えられます。

◆ 常福寺跡

六浦津の規模と施設は明らかでなく、正確な位置もさまざまな推測がなされています。しかし、称名寺が建てられるまでは瀬戸辺りが六浦津としての主要な港であり、北条実時が金沢郷に館を移し、貞顕が瀬戸橋を架けたことにより六浦津と金沢郷が結ばれてからは、平潟湾と瀬戸入海の渡船場を総称して六浦津としたと考えられています。また、称名寺には六浦津で中国との貿易が行われていたことがわかる多くの文書や伝来品も多数残されています。

◆ 上行寺遺跡

平安時代から鎌倉時代の六浦荘

現在の金沢区一帯は、中世における武蔵国六浦荘と呼ばれた荘園にあたります。中世の土地制度は、公領と荘園に大別されていました。古代律令制度をひく公領は、地方では国衙（こくが）の直接支配を受ける地域であり、公領・国領などと呼ばれました。平安時代以降、新たに開発が行われたものの、支配系統を嫌い有力貴族や大寺社に寄進し、国に税収を納めない地域は荘園と呼ばれ、それは中央権力とつながり国家権力の介入を排除するかたちで全国に広まったのです。

六浦は本来なら武蔵国久良岐郡の一部にあたりますが、平安後期には武蔵国六浦荘として独立し、武蔵国衙の直接の支配を受けない地域となっていました。

荘園には必ず本家・領家があるのですが、六浦荘の場合はどこに属していたかは明らかではありません。1277年まで仁和寺勝報宝院の所領であったことがわかっています。

六浦荘は中世には四つの郷に分かれていました。おおよそ大道から瀬戸神社までの一帯を六浦本郷、朝比奈切通しが開かれる以前の古道が通じ、初代金沢北条氏である実泰が領したとされる釜利谷郷、二代目の実時が領した六浦本郷と瀬戸をはさんだ対岸一帯を金沢郷、金沢郷から山をへだてた北側を富岡郷と称していたといいます。四つの郷のうち、瀬戸明神を有する六浦本郷がもっとも古く、ついで平地の多い釜利谷郷が開かれたようです。そして、金沢郷や富岡郷は鎌倉時代後期から発展したと思われます。瀬戸入海での漁業は、北条実時によって殺生禁断令がしかれ、歴代の権力者によって踏襲されたと思われます。東京湾岸での漁業と六浦津の港湾からあがる収益、干潟地域に開発された塩浜でつくられる塩が主な産業でした。

◆ 六浦

◆ 千貫松（森戸海岸）